第24回
春日井市交響楽団
定期演奏会

Marche Slave

Violin Concerto in D major

Symphony No.4 in F minor

2015年
7月5日(日)
春日井市民会館

主　催：春日井市交響楽団
後　援：春日井市、春日井市教育委員会、(公財)かすがい市民文化財団、中日新聞社 、中部大学

ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
伊　藤　　太

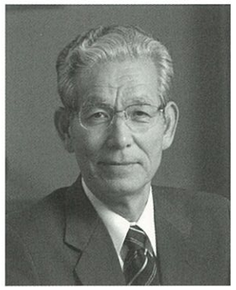
お祝いのことば

木々の緑が目にしみる今日この頃、第24回春日井市交響楽団定期演奏会が開催されますことを心からお慶び申し上げます。

24回目を迎えるこの演奏会は、社会人と学生により結成されたメンバーが日々重ねた研鑽の成果を発揮し、市民の皆様にクラシック音楽をより身近に感じていただくための場として親しまれ、当市の音楽文化の振興に多大な貢献をされています。

オペラ・ミュージックをはじめミュージカルなど様々な分野で活躍されている井村誠貴氏の指揮にのせて、中部地方を中心に積極的に演奏活動を行っている平光真彌氏のヴァイオリンも加わった管弦楽は、艶やかなハーモニーを奏で、観客の皆様を魅了することと期待しております。

最後に、本日の演奏会が盛況に開催されますとともに、貴楽団のますますのご盛栄を心からご祈念いたしまして、お祝いのことばとさせていただきます。



春日井市交響楽団
会長

中部大学　学長
山　下　興　亜

ごあいさつ

本日は、第24回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、まことにありがとうございます。

多くの皆様のご支援、ご協力を賜り、今年もまたこの春日井市民会館で定期演奏会を開催させていただきますことに、心より感謝申し上げます。

今回は、オール・チャイコフスキー・プログラムと題し、チャイコフスキーの名曲の数々をお届けいたします。2012年より春日井市交響楽団をご指導いただき、団員も厚い信頼を寄せております井村誠貴先生に今年も指揮をお願いしました。また、客演コンサートマスターには、平素より当団の指導にあたっていただいております平光真彌さんをお迎えし、ソリストとしても躍動感ある美しい音色で演奏会に華を添えていただきます。今回のプログラムは難曲ばかりではありますが、完成度を高めるべく団員一丸となって練習を重ねてまいりました。

当団は、これからも音楽を楽しみながら、市民の皆様に寄り添い、春日井市の音楽文化の発展に貢献してまいります。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

本日はどうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

プログラム *Program*

チャイコフスキー（1840～1893）
Pyotr Ilyich Tchaikovsky

スラヴ行進曲　作品31
Slavonian March op.31

ヴァイオリン協奏曲　ニ長調 作品35
Violin Concerto in D major op.35

第１楽章　Allegro moderato-Moderato assai
第２楽章　Canzonetta:Andante
第３楽章　Finale:Allegro vivacissimo

《休　憩》 ***Intermission***

交響曲　第４番　ヘ短調　作品36
Symphony Ⅳ in F minor op.36

第１楽章　Andante sostenuto-Moderato con anima-Moderato assai, quasi andante-Allegro vivo
第２楽章　Andantino in mode di canzone
第３楽章　Scherzo (Pizzicato ostinato-Allegro)
第４楽章　Finale (Allegro con fuoco)

指　　揮　　井　村　誠　貴

ヴァイオリン独奏　　平　光　真　彌

演　　奏　　春日井市交響楽団

楽譜協力：トヨタミュージックライブラリー

ごあいさつ

団長 稲垣　徹

皆さん、こんにちは。本日もたくさんのお客様にご来場いただき誠にありがとうございます。
春日井市交響楽団の定期演奏会も今回で24回目を迎えることとなりました。これもひとえに演奏会に足を運んでいただける皆様方のおかげと深く感謝申し上げます。

今回の演奏会は、皆様からのアンケートで「聴きたい作曲家」として人気の高かったチャイコフスキーを取り上げた『オール・チャイコフスキー・プログラム』です。

特にヴァイオリン協奏曲では、本楽団の客演コンサートマスターとして、長年私達の演奏を支え、ご指導いただいている平光先生をソリストにお迎えします。日ごろ先生から学んだことの成果を、オーケストラとソリストとの対話の中に聴いていただけるよう取り組んできました。

交響曲第4番も高度なアンサンブルが必要な難曲ですが、この曲の熱さ・繊細さを表現できるように団員一同心をこめて演奏します。どうぞ最後まで ごゆっくりお楽しみください。

プロフィール

指揮　井村　誠貴　Masaki Imura

1994年大阪音楽大学コントラバス科卒業。在学中よりオペラ指揮者として各地で研鑽を積み、これまでに菊池彦典氏をはじめ、多くの日本を代表する指揮者のもとでアシスタント・コンダクターとして多くの公演に携わり高い評価を得ている。オペラレパートリーも50演目を超え、主要作品の他に、オペレッタや邦人作品の初演にも力を注いでいる。中でも喜歌劇楽友協会におけるJ.シュトラウス「ウィーン気質」の邦人初演は注目を集め、高い評価を得ている。2001年には年間オペラ公演回数が日本人では第4位に入るなどオペラ指揮者としての地位を確立。また同年イタリアに留学。現地ではAs. Li. Coの北イタリア・オペラ公演ツアーに同行し、副指揮者として高い評価を得た。
管弦楽では、京都フィルハーモニー室内合奏団を中心にコンサートを定期的に行う一方、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、京都市交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪交響楽団等を客演。また岐阜県交響楽団、大阪市民管弦楽団等との定期演奏会を客演指揮するなど、アマチュアオーケストラの分野においても貴重な存在となっている。さらに大阪市音楽団、ナゴヤディレクターズバンド等の吹奏楽団との関係も深く、その分野でも注目を集めている。近年はミュージカルにも活動の場を広げ、1999年の「ラ・カージュ・オ・フォール」（市村正親）を皮切りに、「マイ・フェア・レディ」（大地真央）、「レ・ミゼラブル」（山口祐一郎）、「ペテン師と詐欺師」（鹿賀丈史）、「The Musical AIDA」（安蘭けい）、「キャバレー」（藤原紀香）のロングラン公演を成功させライヴCD及びDVDを発売。岩崎宏美や、ダ・カーポ、佐々木秀実、夏川りみといった実力派シンガーとの共演も多く、コンサートでの軽妙なトークも好評を博している。また、「浪速のモーツァルト:キダ・タロー」の作品の編曲も手掛け、キダ・タローとのコンサートも話題となっている。その活動の幅は指揮活動だけにとどまらず、オペラ演出、企画構成、さらには編曲者としての活動も著しくマルチな才能を発揮。2011年には、岐阜3000人の第九を成功に導くなど、多方面で大きな役割を担っている。2014年には、自身の企画により『ベートーヴェン振るマラソン!』と題して、全9曲の交響曲を一日で指揮。クラシック音楽にとらわれない幅広いジャンル、年間200公演近くに及ぶ実績と、繊細且つダイナミックな指揮は、多くのファンを魅了し続けている。
指揮を、湯浅勇治氏をはじめ、松尾葉子、広上淳一、辻井清幸の各氏に師事。
現在、オーケストラMFI指揮者。関西音楽人のちから『集』代表。
2012年より春日井市民第九演奏会音楽監督。本年も12月6日の2015春日井市民第九演奏会でタクトを振るう。

ヴァイオリン独奏 & 客演コンサートマスター　平光　真彌　Shinya Hiramitsu

岐阜県立加納高等学校音楽科を経て、愛知県立芸術大学音楽学部卒業。2005年、同大学大学院音楽研究科修了。在学中、選ばれて学内定期演奏会、卒業演奏会等、大学主催の数々の演奏会に出演。中村桃子賞受賞。ヴァイオリンを青山泰宏、大久保ナオミ、福本泰之、Ewald Danel、服部芳子の各氏に師事。指揮を紙谷一衛氏に師事。2001年、ウィーン岐阜管弦楽団とサン=サーンスのハヴァネラを協演。2003年、外山雄三指揮による愛知県立芸術大学オーケストラとモーツァルトのシンフォニアコンチェルタンテを、翌2004年、ハイドンのシンフォニアコンチェルタンテを協演。2005年、中部大学管弦楽団とサラサーテのカルメンファンタジーを協演。2006年、ブルガリア国立ソフィアフィルハーモニックオーケストラとサラサーテのツィゴイネルワイゼンを共演。2010年、西ボヘミア交響楽団とベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を共演。2010年、プラハ放送交響楽団とサラサーテのツィゴイネルワイゼンを共演。2013年、チェルニーゴフオーケストラとブラームスの二重協奏曲を共演。第6回日本クラシック音楽コンクール入選。第11回同コンクール第3位。第1回宗次ホール弦楽四重奏コンクール第1位。併せて、聴衆賞、オーナー賞も獲得。2004年及び2005年、原村室内楽セミナーにて「緑の風　音楽奨励賞」受賞。2007年、2010年及び2012年、小淵沢室内楽セミナーにて最優秀カルテットとして「緑の風　音楽賞」受賞。2012年には講師特別賞も同時受賞。在学中の2000年から岐阜管弦楽団、2004年から愛知室内オーケストラのコンサートマスターを務めるほか、神戸室内合奏団、中部フィルハーモニー交響楽団などの客演コンサートマスターを務める。ソロ、室内楽の分野でも中部地方を中心とし、積極的に演奏活動を行っている。また、クラシック音楽を親しみやすくより身近に感じてもらうために、サロンコンサートも精力的に行っている。平成24年度から、豊川市の小中学校においてアウトリーチを実施。愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学非常勤講師。

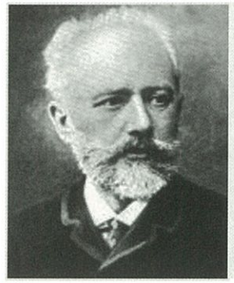
客演コンサートミストレス　松原　宣子　Noriko Matsubara

岐阜市出身。4歳よりヴァイオリンを始め、11歳で岐阜ジュニアオーケストラ入団。
『トヨタ青少年オーケストラキャンプ（TYOC）』に14歳より参加して全国各地のステージを踏み、1998年にはヨーロッパ公演でコンサートミストレスを務める。
京都女子大学初等教育学科卒業後、幼稚園専属ヴァイオリン講師を務める傍ら、（社）岐阜県交響楽団のコンサートミストレスを務める。退団後はフリープロとして、愛知室内オーケストラ、中部フィルハーモニー管弦楽団、岐阜管弦楽団などで客演。
セントラル愛知交響楽団のマタニティーコンサート、0歳児コンサートなどをはじめ、子育て支援センター、小学校の学び舎コンサートなど、子どもたちに生の音楽を届ける活動も精力的に行っている。近年は、子どもから大人まで楽しめる、絵本や物語を題材にしたコンサートを企画・公演し好評を得ている。
『ア・ピアチェーレ弦楽四重奏団』メンバー、ソプラノ入りユニット『キャトルフィーユ』かかみがはら・登録アーティスト、サラマンカホール協力アーティスト、M'sミュージックスクールヴァイオリン科講師。

春日井市交響楽団　Kasugai City Philharmonic Orchestra

春日井市交響楽団は1990年（平成2年）に創設され、市民の音楽愛好家を中心に「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」としての活動をずっと続けております。
団員は、会社員・公務員・医師・教員・主婦・学生・自営業者などからなる約50名で、日曜日の午後、西尾町にある「ハーモニー春日井」のホールで練習しています。ここのホールは大変響きが良く、冷暖房も完備という素晴らしい環境で、市内はもとより市外からも多くの団員が楽器を背負って集まってきます。プロの指揮者やトレーナーの先生に来て頂き、時には楽しく時には厳しく練習に取り組んでいます。
これからも、さらに市民のみなさまに親しまれ、愛される楽団として、市民音楽活動を続けてまいります。暖かいご支援をお願いいたします。

オール・チャイコフスキー・プログラム
～チャイコフスキーと交響曲第4番～



ピョートル・チャイコフスキー
Pyotr Tchaikovsky
(1840-1893)

「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」の3大バレエ音楽、ピアノやヴァイオリンのための協奏曲、「エフゲニ・オネーギン」「スペードの女王」などのオペラ、そして第4番、第5番、第6番「悲愴」などの交響曲。どのジャンルのどの作品をとっても、チャイコフスキーの音楽は日本でとても愛されています。

今回のプログラム3曲を含む下記の作品は、チャイコフスキーが36歳～38歳（1876年～1878年）の時に完成しました。

◆ 1875年　ピアノ協奏曲
　　交響曲第3番「ポーランド」
◆ 1876年　スラヴ行進曲
◆ 1877年　バレエ「白鳥の湖」
◆ 1878年　交響曲第4番
　　オペラ「エフゲニ・オネーギン」
　　ヴァイオリン協奏曲

このように現代でも世界中で親しまれている作品が、次から次へと生み出された時期でした。しかし、この時期が彼にとって輝かしく充実していたかというと、実はそうではありません。ピアノ協奏曲もヴァイオリン協奏曲も献呈した相手に「演奏不可能」と突き返され、「白鳥の湖」の初演も評価を得られませんでした。その度に落ち込み、殻に閉じこもるチャイコフスキーでしたが、数少ない自分の理解者である妹や友人にひたすら手紙を書き続け、それを糧に作曲を続けました。

美しく、メランコリックでドラマティック、でもいつもどこか悲しげな旋律は、もともと非常に内向的で精神的にも「憂鬱病」な彼だからこそのメロディーなのではないでしょうか。

「弦楽四重奏曲　第1番」の「アンダンテ・カンタービレ」が、文豪トルストイに感動の涙を流させたのは、1876年12月に行われた演奏会でした。

このことをチャイコフスキーは妹への手紙に「私があの方の興味をひいているかと思うと、ひどく良い気持ちだし、誇らしく思う」（1876年12月23日付）と書いて送り、10年後の日記（1886年7月2日）に「あの時ほど、喜びと感動をもって作曲家として誇りを抱いたことは、おそらく私の生涯に二度と無いであろう」と記しています。

チャイコフスキーと2人の女性

チャイコフスキーが交響曲第4番を書き始めた1877年は、生涯で最大の転機となった年でした。まさに「運命の年」です。きっかけは2人の女性からの手紙です。

フォン・メック夫人との出会い

音楽をとても愛していたフォン・メック夫人は当時45歳で、大富豪の夫を亡くしたばかりでした。彼女がチャイコフスキーに宛てた熱烈な手紙をきっかけに、2人の交流が始まりました。しかし、何故か「決して会わない」と約束し、文通のみでそれから14年間も経済的にチャイコフスキーを支え続けたのです。

メック夫人の支援によって、チャイコフスキーはそれまでの教職を離れ「作曲家」として独立した生活をすることができました。当時「作曲家」としてだけで生活をすることが出来ていた人はいなかったそうなので、これはチャイコフスキーにとって何よりも有り難い申し出だったはずです。メック夫人がいなければ、今日の私たちは、彼の素晴らしい音楽に出逢えていなかったかもしれません。

メック夫人に宛てた手紙の中で、彼はたびたび自分の悩みを打ち明けていたことからも、チャイコフスキーにとってメック夫人は、生涯で最も重要な人物の一人だったといえるでしょう。

アントニーナとの結婚と破局

1877年4月、チャイコフスキーの元に一通の熱烈な求愛の手紙が届きました、差出人はアントニーナ・ミリューコヴァという元教え子の女性です。彼女は積極的にチャイコフスキーにアプローチし、7月には突然、そしてひっそりと結婚式が行われ、2人は夫婦となります。

しかし、この結婚こそ、チャイコフスキーにとって悪夢の始まりでした。彼はすぐさま家から逃げ出し、自殺を図るなど精神的に追い詰められ、関係は破綻。結婚生活はわずか80日で事実上終止符を打たれることとなりました。以後、彼女と会うことはないままに、協議離婚も成立せず、仕送りだけを続けるという束縛関係に陥りました。

なぜ結婚したのかということについては諸説ありますが、彼が当時着手していたオペラ「エフゲニ・オネーギン」の登場人物と自分を重ねてしまったという説は、いかにも繊細で感性豊かな彼らしさを表しています。

こうした絶望状態の中で生み出された「交響曲第4番」。チャイコフスキーはメック夫人に「これまでの私の作品で、こんなに苦心したことはありませんが、自分のどんなものにもこれほどの愛情を感じたことはありません。」と綴っています。完成後にはその内容についての解説を手紙で送り、最終的には「最良の友に」という言葉を付けて献呈されました。

その手紙の一部をプログラム冊子の裏表紙に掲載しています。手紙を受け取ったメック夫人の気持ちになって、一度読んでみてください。

プログラムノート

≪スラヴ行進曲≫

1876年に起きたセルビアとオスマントルコとの戦争。チャイコフスキーの友人、ニコライ・ルビンシテインはこの戦争の負傷兵慰問募金のための慈善演奏会を企画し、作曲をチャイコフスキーに依頼しました。愛国心の強い彼は喜んで引き受け、わずか5日間で作品を完成させました。

当初「セルビア＝ロシア行進曲」（Serbo-Russian March）と題されたこの曲は、ルビンシテイン指揮の「ロシア音楽協会第1回演奏会」で初演され、大成功を収めました。チャイコフスキーは妹に「先週の土曜日、ここでセルビア・ロシア行進曲（後のスラヴ行進曲）が初めて演奏された。それは愛国的熱狂の完全な嵐を巻き起こした。」と手紙で報告しています。その後、出版の際に原題の「セルビア＝ロシア行進曲」から現在の「スラヴ行進曲」に改められました。

最初の重苦しいファゴットとヴィオラの葬送行進曲。随所に現れるセルビア民謡の旋律に、ロシア国家の主題。そして激しい戦争のような盛り上がりから一転、勝利をたたえる軽快なマーチに…。

内気でメランコリックな普段のチャイコフスキーの音楽からは想像がつかない、骨太で男性的な「ロシア人のロシア人によるロシア人のための行進曲」をお楽しみください。

≪ヴァイオリン協奏曲≫

「ヴァイオリン協奏曲」というジャンルでは、一般的にベートーヴェン、ブラームス、メンデルスゾーンの作品が有名で「3大ヴァイオリン協奏曲」と呼ばれていますが、これにチャイコフスキーを加えて「4大ヴァイオリン協奏曲」とも称されています。

この曲は、結婚に失敗して心を病み、長期海外旅行に出ていた1878年、旅先のスイスで書かれました。完成後、当時ロシアで最も偉大なヴァイオリニストとされていた、ペテルブルグ音楽院教授のレオポルト・アウアーに献呈されましたが、「演奏不可能」と断られてしまいます。重音奏法の要求等、超絶技巧を用いた難曲だったのです。

その後、代わりにアドルフ・ブロツキーに献呈され、1881年に初演されましたが、結果は散々で、その豊かな民族色に辟易し「悪臭を放つ音楽」とまで酷評されたほどです。

しかし、この作品の真価を確信していたブロツキーは各地で演奏し、次第に世評を得るようになりました。その後、アウアーもこの曲を評価し弟子たちにも教えました。結果、現在若きヴァイオリニストの登竜門として知られる「チャイコフスキー・コンクール」の最終課題曲になるほどの名曲になったのです。

第1楽章：アレグロ・モデラート－モデラート・アッサイ　4／4拍子

穏やかなオーケストラの序奏のあとに、ヴァイオリン独奏が朗々と登場します。まず、カデンツァ（即興）のようなひとくさりがあり、落ち着いた主題を奏で、次第にリズミカルになりテンポよくオーケストラと掛け合います。そして熱い、有名な展開部になり、ラストはカデンツァ。最終的にテンポをあげ、どんどん追い込んでいく様は、チャイコフスキーならではの盛り上がりです。

第2楽章：カンツォネッタ・アンダンテ　3／4拍子

冒頭は木管のコラール（讃美歌）で始まります。このコラールを受け、13小節目でヴァイオリン独奏がやや暗めの主題を歌い始めます。途中、転調して一気に色鮮やかになりますが、クラリネットとの対話が、また元のロシア的哀愁を漂わせます。最後、テンポを落としたところで、第3楽章に切れ目なく突入します。

第3楽章：アレグロ・ヴィヴァティッシモ　2／4拍子

いきなりオーケストラの「ff」で始まり、このモチーフが繰り返された後、ヴァイオリン独奏が同じモチーフを奏でます。この第1主題を時間をかけて進展させたのち、オーケストラのユニゾンの一撃を合図に堂々とした第2主題が現れます。現れたのも束の間、また加速し、行きつく先はオーボエとクラリネットが奏でるメランコリックな旋律です。その旋律をヴァイオリン独奏が引き継ぎます。そしてやはり最後はエネルギッシュで迫力満点に終わります。

慎重に、穏やかに進んできた曲が、最後でエネルギッシュに燃え上がる、ヴァイオリン独奏と一体になったオーケストラをお楽しみください。

≪交響曲第4番≫

第1楽章：アンダンテ・ソステヌート　3／4拍子

メック夫人に宛てた手紙にもある「宿命」のファンファーレで曲が始まります。その後、弦楽器が静かにワルツを奏で始めます。この9／8拍子の複雑なリズムのワルツは、次第に下降していきます。とても複雑なリズムで下降して、ためらって、また下降をくり返す、憂鬱なメロディーです。

クラリネットから始まる第2主題のワルツは、木管楽器が代わるがわる演奏する「ため息」で広がります。
その後、冒頭の「宿命ファンファーレ」が何度も登場します。

第1楽章は、全曲の中で最も長く、どこまでも続いている印象があるため「目的を遂げようとする幸福への衝動を妨げる運命の力」を存分に感じられることでしょう。

第2楽章：アンダンティーノ・イン・モドゥ・ディ・カンツォーナ　2／4拍子

オーボエ独奏による憂愁あふれる主旋律と、弦楽器による副旋律で第2楽章は始まります。再現部には第1楽章の第2主題にあった「ため息」が再び現れます。

第3楽章：ピチカート・オスティナート　2／4拍子

弦楽合奏が終始ピチカートで奏される独創的なスケルツォ楽章。いきなりオーボエが鳴り響き、木管楽器による舞曲のようなトリオ（中間部）が始まると、金管楽器による行進曲へと続き、そしてまた、ピチカートへ戻ります。

第4楽章：アレグロ・コン・フォーコ　2／4拍子

冒頭のにぎやかな主題は下降し続け、打楽器も加わりスピードを増します。第2主題は、ロシアの民謡「野に立つ白樺」を引用しています。この下降旋律がロシア民謡の特徴です。

「ため息」を感じさせるワルツ、ロシア民謡の「野に立つ白樺」のメロディー。絶望の下降音の交響曲も、最後はチャイコフスキーの代名詞「バレエ音楽」でおなじみの、華麗な音の乱舞でフィナーレを迎えます。存分にチャイコフスキーのロシア音楽の世界を感じていただける曲です。

（Ob.桑原　祐子）

《特別インタビュー》 指揮者 井村誠貴 ヴァイオリニスト 平光真彌

春日井市交響楽団（通称 KAPO）が2012年よりご指導いただいている指揮者の井村誠貴先生と、2005年から10年にわたりご出演いただいているヴァイオリニストの平光真彌氏。今の春日井市交響楽団（以下 KAPO）にとって必要不可欠な存在といっても過言ではありません。そんなお二人に、定期演奏会を前にお話を伺いました。

KAPO　お二人は仕事柄、沢山の指揮者・ヴァイオリニストと共演されていると思いますが、お互いの魅力はどんなところだと思われますか。

平光　背中に「ずがーん」と雷が走ったような衝撃がありました。井村先生の考えていらっしゃる音楽を何とか少しでも自分の中に入れて、一緒に音楽を作りたいと思いました。僕にとってファンタスティックというかエキサイティングな存在です。

井村　相手のエネルギーを感じ合えることはすごく大事です。平光さんが僕にそれを感じてくれたのと同じように、やっぱりお互いのエネルギーがぶつかった時に生まれるものに喜びや感動が生まれます。コンサートマスターと指揮者の関係性というのは、「一体」なので、うまくかみ合わない時は最後まで辛いんですよ。「平光さんどう考えてるんやろ？」「井村はどう考えてるんやろ？」という疑問をぶつけ合うということがすごく自然に始められたのは、とてもラッキーだったと思いますね。

KAPO　お客様アンケートで「聴きたい作曲家」上位のチャイコフスキー。今回の演奏会の聴き所はどんなところですか。

井村　チャイコフスキーの「音の粘り」、「うねり」や「エネルギー」を感じてもらいたいです。全員が同じ音階をユニゾン（※注1）で演奏するなど、大きな「音の塊」を体感していただけるのではないかと思っています。言わば「KAPOの総力戦」です！一気呵成にたたみ掛ける交響曲終楽章は必聴！

KAPO　今回の定期演奏会は「オール・チャイコフスキー・プログラム」ですが、実は…仕掛け人は井村先生なんです！

井村　KAPOが「もうひとつ上のステージ（レベルアップ）」に行くためには、平光さんという「KAPOをよく知っている人」と協奏曲をやる機会が必要じゃないかと考えました。彼の持っている「秘めた情熱」がスパークして出てくる部分を一緒に演奏出来ること。そして、ひとつのスタイルを徹底してやること（チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を演奏するなら、序曲や交響曲もチャイコフスキーで）で、ひとつの方向性をKAPOの中で作っていけるのかなと。平光さんには協奏曲を演奏していただいた後に、交響曲のコンサートマスターまでお願いするという暴挙を推薦したわけですから、「チャイコフスキー」ありきというよりは、「平光さん」ありきかもしれませんね。

KAPO　ヴァイオリン協奏曲は、チャイコフスキーから最初に献呈されたヴァイオリニスト、レオポルト・アウアー（※注2）が「難しくて弾けない」と断ったと言われていますよね。

平光　当時演奏不可能と言ったアウアーも、実際にその後演奏しているんですから。僕自身、皆さんの前で演奏するっていうのは、ある意味全部裸になってさらけ出すということで、怖いといえば怖いことなんですけど、逆にそれが自分の次のステップになるし、またそれを皆さんに感じて欲しいです。協奏曲をやった後に、交響曲のコンサートマスターをやるっていうのは、なかなか経験できないことで、僕にとっては、すごいチャレンジです。そういうチャンスをもらった時にどこまでやれるか。自力を上げるチャレンジ精神や意気込みって大事だと思うんです。話をいただいたときに、びっくりしつつも、自分の中で、えも言われぬモチベーションがふつふつと出来上がっていくのを感じたんですよね。今回はいつも以上にやりがいを感じていて、本当にありがたいなと思っています。

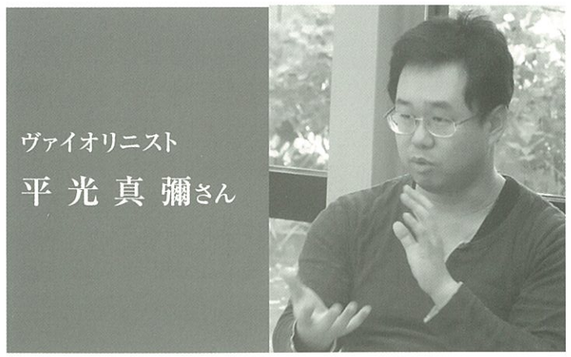
KAPO　そんな協奏曲の聴き所を教えてください。

平光　個人的にはチャイコフスキーは好きな作曲家です。チャイコフスキーの精神性、流れるリズムはひょっとしたら日本人にとって近い精神かもしれません。よくチャイコフスキーと言えば、「美しいメロディー」と言われますが、その裏側に流れる彼の心・精神性を僕たちも表現するためにも、チャイコフスキーという作曲家と、とことん向き合いたいです。そのあたりを是非聴いてもらいたいです。

KAPO　私たちが「お客様に愛される市民オーケストラ」であり続けるには、何が必要だと思われますか。

平光　オーケストラをやっている以上は「音楽のよさ」が、お客様に伝わるのが一番だと思います。曲の本質へ向かおうという姿勢を持ち続けることができているかがお客様に伝わって、「このオケいいな」と思ってもらえたら、それが市民の愛するオーケストラに自然につながっていくのかな、と思います。

井村　プロとアマチュアの「根幹にあるもの」は変わらないと思いますが、「担うべき役割」というのはちょっと違うかもしれません。プロの演奏会は「技術や音楽を聴きに行くこと」が主となってきます。一方、アマチュアにファンがつくのは、「プロ野球が好きなのか、高校野球が好きなのか」ということに近いのかもしれません。プロ野球で、難しい技を簡単に見せる技術を素晴らしいと感じる人もいれば、高校野球の最後の1球をエラーしたことによって負けてしまい、泣いている姿を見て、感動する人もいます。



音楽も同じで、プロもアマチュアも、1音1音一生懸命やることにはなんら変わりはないです。僕と一緒にやる以上は、必死に音を追いかけて、野球で例えるなら、時にはボールをうまくキャッチできなくてもいい。でもたまにファインプレーが起こって、なぜかグラブの中にボールが入ってた！みたいな奇跡が起こるのかもしれないし。「あ、これはプロだったら取れるな」ということを、「こんなの高校生が取れるわけがない…取ったぁっ！！！」みたいなことは、やっぱり、アマチュアオーケストラのひとつの形として求めていっていいんじゃないかな。もちろんそれはあくまでも「うまくなりたい」という大前提の中で、練習を繰り返しやっている結果なのかもしれない。そういう意味では奇跡じゃないかもしれないけど、全力で走ってみることをまずやり続けなければいけないと思いますね。

KAPO　本日はありがとうございました。お二人の熱いお言葉に、身の引きしまる思いです。皆様に愛されるオーケストラを目指し、1音1音を一生懸命追い続けようと思います。これからもご指導よろしくお願いいたします。

（※注1）複数声部が同一旋律を演奏する事。
（※注2）当時ロシアで最も偉大なヴァイオリニストとされていた、ペテルブルク音楽院教授レオポルト・アウアーのこと。アウアーは楽譜を読むと演奏不可能として初演を拒絶したが、後にはこの作品を演奏するようになり、弟子にもこの作品を教え、彼らが名演奏を繰り広げることで、4大ヴァイオリン協奏曲と呼ばれるまでに評価が高まった。

「最良の友に」

Dear Nadezhda Filaretovna von Meck

～わたしたちの交響曲「交響曲第４番」 1878年2月17日　フォン・メック夫人へ宛てた手紙より～

〔……〕私たちの交響曲には確かに標題があります。つまり、この交響曲が表現しようとしていることは言葉で表現可能です。ほかならぬ貴方にだけは、交響曲全体と個々の楽章の意味を説明できますし、またそうしたい。

導入部は交響曲全体の核で、絶対的に重要な楽想となっています：

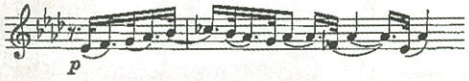
〔「宿命」の動機〕

これは宿命です。幸福追求の情熱を妨げる、あの運命の力です。幸運と安らぎがきちんと成就しないように嫉妬深く見守っている。ダモクレスの剣のように常に頭上につり下がり、絶えず心を苦しめる。避けられないし、とどめることもできない。
おとなしくして、嘆くことしかできない：

〔第１主題〕

喜びも希望もない気持ちは、いっそう強まり、激しさを増します。現実から背を向けて、夢想に耽る方がよさそうです：

〔第２主題〕



ああ、実に心地よい！少なくともこれは甘美でやさしい夢です。ありがたいことに、立派な人物らしき姿が現われ、どこかへ手招きします：

ああ、何て素晴らしいのでしょう！アレグロのしつこい主題ももはや彼方です。夢はほんの少しずつ心を満たしていきます。陰鬱で嬉しくないものは、すべて忘れ去られる。ええそうです。これが幸福なのです！

だめだ、所詮は夢だ！宿命は、夢の中からさえ立ち現われる：

結局、人生とは、つらい現実と、幸福をめぐる束の間の夢とが絶えず交替しているにすぎない。安らぎの停泊地などないのです。海に呑み込まれて深みに連れ去られるまで、せいぜい航海を続けているがいい。第１楽章の標題とは、ほぼこのようなものです。

交響曲の第２楽章は、憂愁（タスカー）の別の段階を表現しています。夕方、ひとり腰掛け、仕事で疲れたまま、本を手に取るが、ふと落としてしまう。そんなときに催すメランコリックな感情です。次々と思い出が浮かぶ。いかに多くのことが過ぎ去ったのかと嘆き、青春を思い出して懐かしむ。過去を嘆くばかりで、人生をやり直す気はない。人生に疲れたのです。休んで周囲をみまわすばかりでいる方が楽しい。いろいろな思い出が甦る。若い血が燃えたぎり、充実感に満ちた悦ばしい時もあった。辛い時も、償いがたい損失もあった。みんな遠い昔の話だ。思い出に浸るのは悲しいが、甘美でもある。

第３楽章は、特定の心情を表現していません。気まぐれなアラベスクであり、酒を飲み、酩酊の第１段階を体験しているときに空想の中で駆け抜けていくような捉えにくいイメージです。愉快でもなければ悲しくもない。何を考えているわけでもない。想像をたくましくすると、なぜか奇妙な素描を導いてしまった。そんなイメージの中で、いきなりほろ酔い気分の農民たちの絵が思い出され、町の歌が聞こえてくる……。どこか遠くで軍隊の行進が通り過ぎる。寝入りばなの脳裡にうかぶ脈絡のないイメージです。現実とは無関係で、奇妙で、突飛で、何のつながりもない……。

第４楽章。自分自身の中に喜びの動機が見つからないならば、他人に目を向けよ。そして民衆の中に足を踏み入れるのだ。彼らが無限の喜びに浸って楽しむ様子を見たまえ。民衆がお祭り騒ぎをしている絵です。我を忘れ、他人の喜びの場面に浸り切りかけたとたんに、執拗な宿命がまた現われ、自己主張をする。だが人々は気に留めない。振り向きもしなければ、一瞥もかけてくれない。こちらが孤独で悲しんでいるのを知らないのだ。それにしても彼らは何て陽気なのだろう。率直で飾りがない。悪いのは自分なのだから、この世は悲しみだらけなどと言うべきでない。素朴で力強い喜びはある。他人の喜びを喜ぶがいい。とにかく生きていけるのだから。さあ私の親愛なる友よ、交響曲をめぐる私の説明は以上です。やはり不明確かつ不完全であって、そもそも器楽は仔細な分析にはそぐわない。ハイネの指摘どおり、言葉の終わるところから、音楽は始まるのです。〔……〕

（訳：宮澤淳一）

参考文献

宮澤淳一著：
「チャイコフスキー・宿命と憧れのはざまで」
ユーラシア・ブックレット92
ユーラシア研究所企画/東洋書店